

SMC金融・経済マーケットレポート

Reporter Your Financial Brain SMC 豊島 健治

金融収縮破綻の2側面 (再び「望最善 覚悟最悪」)

先月、東京でセミナー講師を務めていたところ、休憩時間にうら若き女性が近づいてきました。勿論、食事の誘いなどではなく質問でした。「あの～、宮崎銀行は大丈夫でしょうか？」

その方は宮崎で事業を営む会社の後継者で宮崎銀行をメイン取引にしているらしく、宮崎銀行が業績を下方修正し今期赤字決算に陥るといふ報道を心配しているようでした。「宮崎銀行は地場の古い地銀ですので大丈夫でしょう。少し位の赤字で潰れることはありません」と答えたと同時に、宮崎の地場大手ゼネコンがこの8月に潰れたことを思い出しました。

帰ってから信用調査会社のHPで調べてみました。倒産した宮崎県のゼネコンは「志多組」でした。地場ゼネコンに拘わらずその規模(負債総額278億円、内宮崎銀行貸出70億円)の大きさと債権者数(1,100社)の多さに驚きました。「地域経済に与える影響は超ド級だな」と思ったのですが、倒産の原因はどれも東京にあるようでした。...売上の半分を稼いでいた東京支店で大口の不良債権が発生した...成る程、この地方ゼネコンは首都圏の新興デベロッパーの相次ぐ破綻の影響を受け連鎖的に倒産したのでした。

今、都内を中心とする首都圏では凄まじい金融収縮が起こっているようです。もちろん全ての業種に対してではなく、特定の業種(不動産)に対して起こっているのですが、その収縮の様は昔の「貸し剥がし」を想起させます。近年急速に業績を拡大してきた所謂新興デベロッパーがその対象となっているのはご案内した通りですが、今や、上場、非上場の区別なく、不動産を大量に仕込んだ企業が銀行の融資対象から外され破綻に至っていると聞きます。

今回の金融収縮破綻には際立った特徴があります。第一は、その多くが黒字倒産(資産超過型倒産、資金繰り倒産)であるということです。損益が黒字であっても、前期決算で過去最高の業績を上げていても、お金が尽きれば倒産に至るといふ現実をまざまざと見せつけたのです。

資本勘定がマイナスに陥り債務超過となった時ゲームオーバーとなる、それが資本主義のル

ルであると教えられましたが、現実は違っています。バブル崩壊後、大幅な債務超過状態にあっても事業を存続させてきた会社もありました。色々な支援策があったからでしょうが、今回の黒字倒産の連続をみると、債務超過となった時ではなく、「お金が尽きた時ゲームオーバーとなる」のが現実世界のルールだと再認識せざるを得ませんでした。

更にもう一つの特徴は、銀行の素早い行動です。不良債権処理が終わって体力が回復したからでしょうか、あるいは考え方を変えたからでしょうか、損切りの決断、あるいは撤退の決断が早い。ここでも会計上の黒字赤字という過去情報ではなく、信用不安、信用リスクが生じれば撤退、ということが定着しているような気がします。

東証一部のアーバンコーポレーションについては先にも触れましたが、今年3月期、連結ベースで616億円の経常利益を上げ純資産1,102億円に達したこの会社も8月にあっけなく倒産しました。昨年3月末にみずほ銀行は96億円の融資残高(融資順位2位)がありましたが、倒産時には何と全て回収しゼロとなっていました。その間融資残高を膨らましてきた多くの地方銀行などは地団駄踏んで悔しがったかもしれませんが後の祭り。このアーバン社におけるみずほ銀のような行動は昔では考えられない行動です。

今回起こっているサブプライムショックを契機とした信用収縮が何時まで続き、今後拡大していくのか縮小していくのか私にも分かりませんが、株価の動きなどをみると悲観的になってしましますが、11年前にも書いたように私達にできることは「最善を望みながら最悪を覚悟する」ことではないでしょうか。

多分、メガバンクと呼ばれる大手銀行と地域金融機関では行動原則が違うと思います。しかし、地域を捨てられない、地域から逃げられない地域金融機関だって何を仕出かすか判らない時代に突入しているような気がします。銀行に依存した経営から脱却し、万一銀行融資が止まっても何とか生き延びていけるような道を模索しておく必要があると思うのです。

繰り返しますが「最善を望みながら最悪を覚悟する」、それが東京バブル崩壊の困難を乗り越えてきた者が得た教訓ではないでしょうか。